

II サムエル15章「苦難の中での助け」

私たちは恵みによって、まことの神、主を知りました。苦難の中でも主に向かって祈り求めることができます。そして、生きておられる神は確かに私たちの祈りを聞いてくださり、愛と正義の神は最善のみわざを行つてくださいます。問題は私たちが主を信頼しているかどうか、主のみわざに気づいているかどうかでしょう。

1. アブサロムの謀反（：1～12）

ダビデはアブサロムを赦しておらず、アブサロムはダビデに不満を持っていたでしょう。妹のための復讐であったのに言い分を聞いてもらはず、さばきも下されず、形だけの和解に落胆して、アブサロムの心にはダビデに対抗する思いが大きくなりました。アブサロムは自分のために軍勢を手に入れ、人心をつかむ策略を行います。いつも、エルサレムの門に通じる道に立って、王のところにさばきを求めてやって来た人に話しかけていました。3節。「王の側にはあなたのことを見てくれる者はいない」というのは誇張していますが、アブサロムはそのように人々に印象付け、それに対して自分なら「訴えを正しくさばくのだが」と宣伝していました。そして、人が近づいたびに、彼は手を伸ばし、その人を抱いて、口づけしていました。親しみやすく、同情的な人物として自分を宣伝していました。こうして、「アブサロムはイスラエルの人々の心を盗んだ」のです。多くの人々の心をダビデから離し、自分に引き付けていました。

アブサロムがそのようにいつも行っていて、4年経ちました。アブサロムはついに謀反を決行します。「主に立てた請願を果たすために、どうか私をヘブロンに行かせてください」という口実で出て行きます。しかし、その裏でアブサロムは、すでに掌握していた全部族に、「アブサロムがヘブロンで王になった」と言い広めさせる準備をしていました。また、エルサレムから200人の人々がアブサロムと共に出て行きました。その人々は何も知らずに、ただ招かれて、ついて行ったのです。アブサロムは自分に大勢の支持者がいるように見せかけたのでしょう。また、アブサロムはヘブロンに、ダビデの助言者アヒトフェルを呼び寄せました。このアヒトフェルは知恵と判断力があり、ダビデにとって力強い助言者でした。その彼がアブサロムの側についたことで、アブサロムが優位になります。

人の姿は今も変りません。野心を持ち、人々の心を盗み、自分の計画通りに事を進めようとする人がいます。その根本には、自分が顧みられていないという不満があるのではないでしょうか。そうではなく、主に愛されていることを知り、主から与えられる賜物を、自分を高めるために用いるのではなく、人々に仕え、主に仕えるために用いることが幸いです。

2. ダビデの都落ち（：13～23）

アブサロムの謀反が決行されて、全イスラエルの人々の心がアブサロムになびいているとの報告をダビデは受けました。すると、すぐにエルサレムから逃げる準備をします。14節。

急なことで備えができるない今は十分に戦えないということでしょう。また、息子とは戦いたくなかったでしょう。それとともに「剣の刃でこの都を討つといけないから」と言い、イスラエルの都であり、主の箱を置いた天幕がある場所を戦場にしてはいけないと考えました。王の家来たちは「王様の選ばれるままにいたします」と言ってダビデに従います。ダビデの家族も従い、王宮から退去します。

ただし、ダビデは王宮の留守番として10人の側女を残します。態勢を立て直して帰還するという意志がありました。そして、それは単に自分の希望ではなく、「あなたの王座はとこしまでも堅く立つ」との主の約束のゆえに、たとえ息子であっても謀反によって王が変わることにはならないはずだと自信がありました。

この時に作られた詩篇3篇からダビデの主への信頼が分かります。敵が多くなっても、主こそ周りを囲む盾であり、主が支えてくださり、主が救ってくださるとダビデは信頼しています。

そして実際に、主はダビデの周りに助けを与えてくださいます。王のすべての家来は王の傍らを進み、王を守りました。家来の中にガテ人イタイという人がいました。ガテはペリシテの町で、ダビデがかつてサウルに追われていた時に身を寄せた所です。その時に関わりがあったのか、ガテ人イタイは亡命者としてダビデのもとに来て、家来となっていました。そのイタイにダビデは言いました。19～20節。

イタイにとってダビデに付き従うことは何の益もないとして、エルサレムに戻るように勧めます。ダビデはイタイを思いやり、主の「恵みとまことがあなたとともににあるように」と主に委ねて送り出そうとします。アブサロムは人々の目を自分に集めようとしました。それに対して、ダビデは人々の目を神、主に向けさせようとするのです。

自分が困難な中にあっても、イタイのことを思いやるダビデのことばに、イタイはかえってダビデへの尊敬を抱きます。21節。ペリシテ人であるイタイが「主は生きておられます」と言い、イスラエルの神、主への信仰を告白しています。ダビデを尊敬し、ダビデが信頼している神、主を信頼して生きていこうとするのです。そして、ダビデと生死を共にすると誓って、従っていきます。この後、イタイはヨアブ、アビシャイと並ぶダビデ軍の将軍となります。

このようにダビデに従う家来たちを主は備えていてくださいました。ダビデが信頼した通りに、主はダビデを囲む盾となられ、また盾となる家来たちを保つていてくださいました。こうしてダビデと家来たち、家族たちはエルサレムから東の方へ逃げて、キデロンの谷を渡り、荒野の方へ進んで行きました。

3. ダビデの協力者たち（：24～37）

付き従う家来たちの他にも、主はダビデに協力する者たちを備えてくださいました。

24節。神の箱が置かれた天幕で仕えていた祭司ツアドクとエブヤタル、そしてレビ人たちも、神の箱を担いで、ダビデの一行に従おうとしました。しかし、ダビデは彼らをエルサレムに戻させます。

かつてイスラエル人は戦場に神の箱を持ち出して失敗しました。ダビデはそのように神の箱を「お守り」のように使おうとはしませんでした。そして、主のみこころに委ねると言います。25～26節。

ダビデは、アブサロムの謀反は自分の態度が招いたことであると分かっていたでしょう。そして、このことも主は御手の内に治めていて、正しいさばきを行われると信頼して、委ねています。

それと共にダビデは、謀反を起こすことはやはり間違っていると考えていたでしょう。それでふさわしく対処できるように、自分に従おうしてくれた祭司ツアドクとエブヤタルに協力を求めます。27～28節。

都の様子を荒野に逃れる自分に知らせて欲しいと求めたのです。こうして、ツアドクとエブヤタルは神の箱を戻し、エルサレムにとどまりました。

それから、ダビデと一行はオリーブ山の坂を登りました。その時ダビデは、堰を切ったように泣きました。主を信頼し、主に委ねてはいても、悲しみは大きいのです。息子アブサロムが謀反を起こしたことには大きな痛手です。自分の無力さに落胆していたでしょう。そこにさらに、自分の助言者であった「アヒトフェルがアブサロムの謀反に荷担している」との知らせが入り、ダビデの悲しみに追い打ちをかけます。

しかし、そんな悲しみと落胆の中でも、主はダビデに励ましを与えるました。32節。苦しい状況の時に友が来てくれたことは大きな励ましとなったでしょう。そして、フシャイはダビデのために重要な役割を果たすことができるのです。フシャイは王室の役人だったようです。それで、都に戻って、アブサロムに仕え、アヒトフェルが助言をするとき、それを打ち破るようにして欲しいとダビデは頼みます。そして、アブサロムの情報を祭司ツアドクとエブヤタルに伝え、二人の息子アヒマアツとヨナタンによって自分に伝えて欲しいと頼みます。そのようにして都の情報を得られるなら、ダビデ陣営にとって助けとなります。

こうして、フシャイは都に戻りました。アヒトフェルがアブサロム側についたことはダビデにとって大きな痛手でしたが、それを打ち破る助けを主はダビデに与えてくださったのです。

苦難の中に置かれても、私たちは主を信頼し、主を呼び求めるすることができます。目には見えませんけれども、主が確かに私たちの周りを囲む盾となってくださいます。主は私たちの祈りを聞いて、答えてくださいます。実際的な助けを主が私たちに与えてくださるのです。殊に、主を礼拝するところで、「主はその聖なる山から」答えてくださるのです。

すでに主は、それぞれの苦難の中で、助けを与えてくださったのではないか。主の恵みとまことに感謝し、信頼している私たちに、主は確かに応えてくださいます。そして、私たちをさらに主ご自身のそばに近づかせてくださるのです。